

幸楽（こうらく）窯

徳永虎助（とくながこすけ）（生没年不詳）が 1865 年に創設した幸楽窯は、社名を徳永（とくなが）陶磁器株式会社という。現社長を務める 5 代目の徳永隆信（とくながたかのぶ）（1967 年生まれ）は、有田の中でどこよりも安心して親しみやすい窯元を目指している。幸せを呼び起こし有田の歴史とコミュニティを結び付けてくれるようなやきもの作りに誇りを持っている。

幸楽窯で作られる製品の種類は代を重ねるごとに多様化してきた。20 世紀初期はシンプルなタイプの火鉢（ひばち）の生産に特化し、1930 年代には日本軍向けのテーブルウェアを生産した。戦後は再び家庭用製品や業務用製品の生産を主力とし、1962 年に現在の場所に移ってきた。有田にある多くの窯元と比べても、幸楽窯は燃料油窯、次いでガス窯をいち早く取り入れ、生産能力を高めた。最盛期には 500 人以上の従業員を雇っていた。現在の従業員数は 30～40 人ほどに減っているものの、世界各国のアーティストと連携しながら改革を続けている。

2013 年に始まった滞在型作陶（アーティスト・イン・レジデンス）プログラムは、有田の窯元では初めての試みだった。アーティストたちは工房のスペースや道具を使って、幸楽窯で働くプロの職人・名工と一緒に作業をすることで自らのアイデアを形にすることができる。陶磁器に興味がある人なら誰でも、デザインから販売に至るまで生産の全工程について学ぶことができる。敷地内にはゲストハウスがあり、世界各国のアーティストたちはコラボレーションしたり一緒に働いたりすることで、有田焼制作の新たな面を見せることができる。これまで 100 人を超えるアーティストが来日し、プログラムに参加した。

本館は、廃校になった明治（めいじ）時代（1868～1912）の小学校から出た木材を使って建てられた。建物の一部はアウトレットショップに転用され、トレジャーハンティングが行われる場所にもなっている。トレジャーハンティング体験は幸楽窯の最大の売りのひとつである。売れ残ったり販売できなかったりした商品が廃棄されずに残されており、訪れた人はバスケットを手に、木箱に入っている器を制限時間の間に好きな分だけそこに詰めることができる。ハンティングには、通常のハンティングとプレミアムハンティングの 2 種類があり、後者にはより色が華やかで貴重な器も含まれており、器の選択肢はほぼ無限大である。木箱の中には、試作品や余り物の商品、20 年以上前の昔のものが入っていることもある。明治時代の学校に使われた木材を再利用したのと同様に、このトレジャーハンティングも古いアイテムに新たな命を吹き込む素晴らしい方法となっている。幸楽窯にとっては、倉庫で長年埃をかぶっていた在庫を減らせる有効な方法となったのと同時に、愛好家に磁器を楽しく手に取ってもらえる機会にもなっている。